弥生3月に思うこと

知事コラム 佐竹びじょん!

この3月11日は東日本大震災から数えて5年になります。人の心や国土に大きな爪痕を残し、社会のあり方まで考え直させられた巨大な災害でした。犠牲になられた方のご冥福を改めてお祈りするとともに、道半ばにある復興に取り組んだり、今だに避難を続けている方などのご心労に、今後も想いを寄せていきたいと考えております。

さて、春を迎える弥生3月は、会社や団体、国や自治体など多くの組織では年度末という仕事上の区切りの月で、学生生活を終え4月からの社会人入りの準備に胸をときめかせる人たちがいる一方で、多くの人が定年退職で長年勤務した職場を去る月でもあります。

冬の厳しさから解き放たれ、日一日と春の兆しが強まり、風景は明るくなっていくものの、退職される人にとっては、第一線の現役から引退という人生にとって大きな区切りの月で、長い間の職場生活の様々な思い出が胸を過ぎり、無事定年を迎え、ほっとするとともに、一抹の寂しさを覚える月でもありましょう。

私自身は定年退職というものを経験しておらず、その思いの実感は解らないものの、一緒に苦労した多くの職員を送り出す側としての寂しさを覚える月になります。

特に、3月末に長年勤めた県庁を去る職員の方一人一人に、「長年ご苦労様でした」と声をかけながら退職辞令をお渡しする時には、組織の長としてなんとも言い難い感慨が沸いて来るものです。

退職する県職員のみならず、多くの会社や団体をこの3月に退職する県民の皆様、長い間本当にご苦労様でした。